

# コミュニケーション能力向上に重点を置いた海事英語教育の取組み ～内容重視の統合学習法～

杉本 昌弘\*, 吉留 文男\*\*

## Maritime English Training for Improving Communicative Competence ～Content-based blended learning～

Masahiro SUGIMOTO, Fumio YOSHIDOME

### Abstract

*An “onboard training through English” program has been implemented at Oshima National College of Maritime Technology since 2007, by which college students carry out essential shipboard operations in English. To improve the program, a “content-based blended learning” approach has been taken since 2008.*

*This paper will present the “content-based blended learning” approach for improving the students’ communicative competence in English. The “onboard training through English” program should be regarded as a productive output activity integrated with other two learning experience: communicative classroom activities and self-learning with e-learning materials. “Task-based instruction”, which was introduced as a classroom activity this year, will be presented. Effectiveness of the integration of different learning methods at different learning stages will be discussed.*

**Key words:** blended learning, content-based instruction, task-based instruction

### 1. はじめに

商船学科学生の実践的英語コミュニケーション能力向上を目的とし、平成19年度から商船学科4年生を対象とした校内練習船実習に英語コミュニケーションを取り入れ、船の出入港、機関始動などの操作指示を英語で行っている。

そこで、平成20年度からは、「英語による練習船実習」を補完し、学生の英語コミュニケーション能力を効果的に高めるために、「内容重視の統合学習」手法を採用することとした。これは、「英語による練習船実習」を実践的な言語産出（production）の機

会ととらえ、これに内容重視の言語学習としての英語授業およびeラーニングを組み合わせた学習法である。

### 2. 「内容重視の統合学習」の海事英語への適用

#### 2.1 内容重視の統合学習

海事英語分野にて取組みを始めた内容重視の統合学習とは、実践的な「英語による練習船実習」に、コミュニケーションに重点を置いた「専門英語（海事英語）授業」および「eラーニング」を組み合わせるものである。学生は教室授業において、または

e-ラーニング学習コンテンツを用いて、海事分野の題材を英語で学習する。そして、そこで得た海事分野の知識および英語コミュニケーションスキルを活かして、練習船運航という業務遂行のために英語を用いることになる。海事語彙、標準会話フレーズ、文法事項などの言語項目は、教室での授業やe-ラーニングにより与えられるが、これらはその後の「英語による練習船実習」での船舶運航操作に必要な不可欠なものばかりである。統合学習を構成するそれぞれの学習形態において、学習する言語項目（語彙、フレーズ、文法など）に一貫性を持たせることは、学生の言語習得と定着の両面において効果的と考えられる。

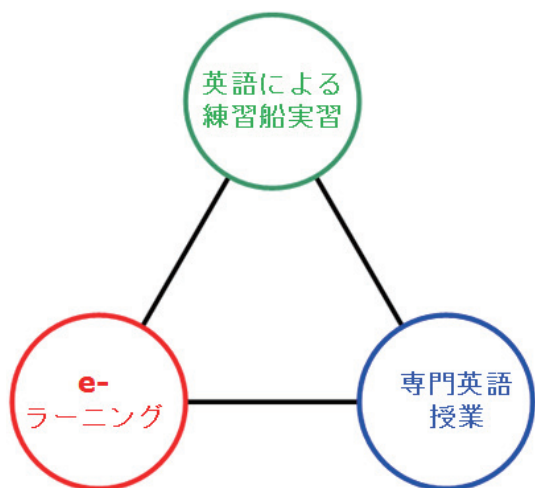


図1 海事英語における統合学習

### 2.1.1 e-ラーニングとロールプレイ演習を組み合わせた海事英語授業

「英語による練習船実習」プログラムの準備として、学生は海事語彙および標準フレーズを「専門英語（海事英語）授業」で学習する。

一回の授業では、練習船実習に関する様々なトピックの中から一つを選んで学習している。航海コースの学生には、出港、入港、抜錨、投錨作業、周囲船舶の見張り、報告および航海当直の引継ぎなどの題材を選び、機関コース学生には、主機の暖機、始動、停止、冷機作業、機関室内の見回り点検および航海当直の引継ぎなどの題材を選んだ。

各トピックにおける言語学習は以下のような手順

で行われる。

- (1) トピックで取り上げる船舶運航内容、操作手順などの確認
- (2) 新出語、フレーズの発話練習
- (3) e-ラーニングによる自己学習
  - (a) 語彙、タ<sup>ダ</sup>イ<sup>ダ</sup>ク<sup>ク</sup>のリ<sup>リ</sup>ス<sup>ス</sup>ン<sup>ン</sup>グ<sup>グ</sup> 演習
  - (b) 語彙、タ<sup>ダ</sup>イ<sup>ダ</sup>ク<sup>ク</sup>の<sup>シ</sup>ブ<sup>ブ</sup>キ<sup>キ</sup>ン<sup>ン</sup>グ<sup>グ</sup> 演習
- (4) ロールプレイ演習
- (5) e-ラーニングによる語彙確認テスト

上記手順の中で、今年度はロールプレイ演習の方法を変更して行った。平成21年度までは、使用教科書の各トピックに掲載されているダイアログを用い、ペアで役割を定めて暗誦する方法をとっていた。図2に暗誦フレーズの例を示す。

Station for leaving port

B: Let go forward spring.

F: Letting go forward spring, sir.

B: Let go head line.

F: Letting go head line, sir.

F: Let go all forward, sir.

B: Let go all forward, bridge understood.

F: This is forward station. All lines clear, sir.

B: All lines clear, roger.

F: Forward distance to the berth is three meters, sir.

B: Three meters, roger.

B: We will turn clockwise.

B: Dismiss the station.

F: Forward station dismiss, sir

図2 暗誦フレーズ例

この方法では、学生は各パートのセリフを暗誦することに集中するため、フレーズを覚える効果はあるものの、実際の運航操作と関連づけることが難しいという欠点があった。

この欠点を改善するために、平成22年度はタスク演習の形式をとった。各ペアに運航操作に関するタスク（目標言語で情報のやりとりを行わせる課題）

を与え、これに基づきタスク遂行のためのコミュニケーションを学生に行わせるものである。図3にタスクの例を示す。

タスク：出港部署を想定し、以下の手順で連絡を行う

1. 順次、ラインのレッコを指示する
2. 船首配置の全ラインレッコ後、クリアであることを報告する
3. 船首と岸壁の距離を報告する
4. 右転することを連絡する
5. 出港部署を開く

図3 タスク例

図2に示す暗誦フレーズおよび図3に示すタスクは、ともに出港部署に関するものであるが、暗誦フレーズ数に比べてタスク項目が少ないことがわかる。これは一つのタスクに「操作指示」「指示の復唱」「操作の報告」「報告の確認」といった一連のコミュニケーションが含まれることを意味している。

この方法では、フレーズ暗誦とは異なりコミュニケーションパターンは一通りとは限らない。学生は自らコミュニケーションに必要なフレーズを考え、ロールプレイにおいてお互いの発話の内容を理解したうえで会話する必要がある。学生にとっては難度の高い演習であるが、実際の運航操作をイメージしながら課題解決のための言語運用が出来るという利点がある。

### 2.1.2 英語による練習船実習

平成19年度以降、4年生以上の学生は、校内練習船実習における基本操作のコミュニケーションを英語で行っている。実習終了時には船内英語コミュニケーションに関するアンケート調査を実施しており、図4～図7は平成21年度および22年度の4年生前期実習終了時のアンケート結果のうち学生各自のスピーキングおよびリスニング力に関する自己評価である。

図4と図5を比較すると、航海、機関コース学生

ともに平成22年度の4年生のほうがメモを見ずにスピーキング活動が出来た傾向を示した。特に航海コース学生において大きな進歩がみられた。

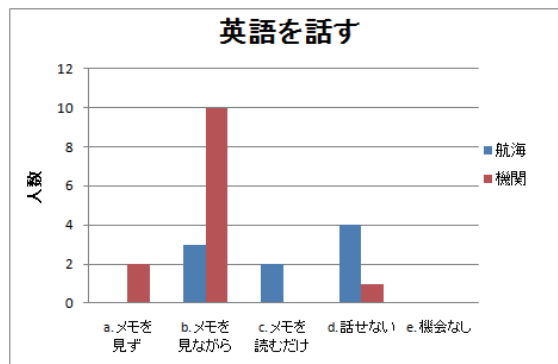


図4 スピーキング自己評価 (H21)

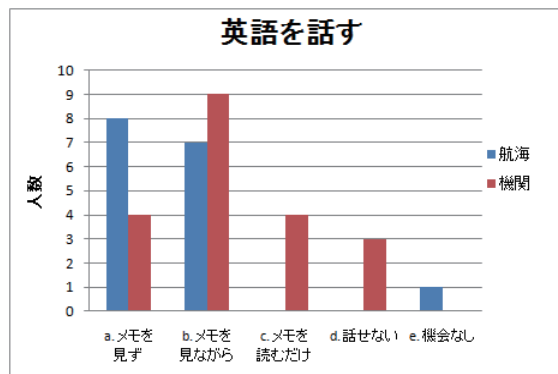


図5 スピーキング自己評価 (H22)

次に、図6と図7を比較すると、航海、機関コース学生ともに平成22年度の4年生のほうが若干リスニングに対する理解度が高い傾向を示したが、スピーキング力に比べると向上の度合いは小さかった。

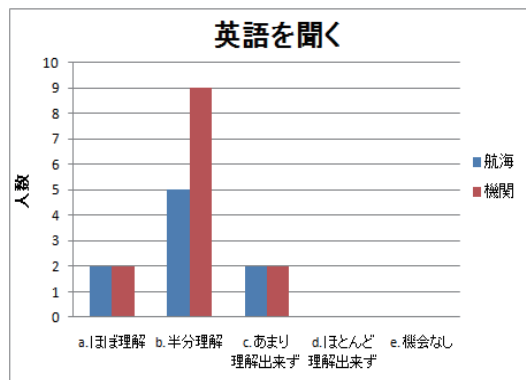


図6 リスニング自己評価 (H21)

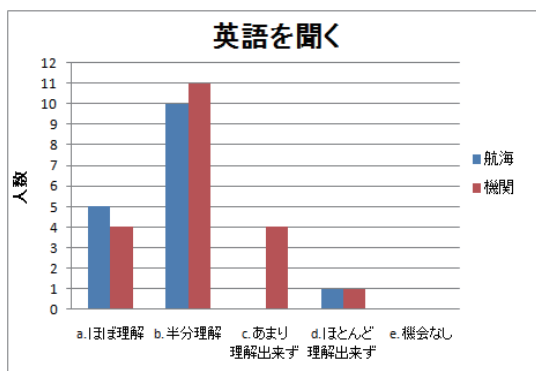


図7 リスニング自己評価 (H22)

以上の自己評価結果を考察すると、タスク演習の導入など事前学習方法の改善により、船舶運航の各状況に応じて適切な発話を行うスピーキング力は向上したと考えられる。しかし、教室でのタスク演習に比べて船上でのマイクや電話を通じた聞き取りが困難であることから、船上会話特有のリスニング力向上には、実際の環境に近い状態で聞き取り演習を行うなどの工夫が必要と思われる。

### 3. おわりに

コミュニケーション能力向上に重点を置いた海事英語カリキュラムにおいて、実践場面での英語使用機会を提供する実践的な「英語による練習船実習」、その準備としてロールプレイ演習を中心として行われる「専門英語（海事英語）授業」及び「e-ラーニング」を組み合わせた内容重視の統合学習は一定の効果が確認された。

今後は、リスニング力向上のための学習プログラムを改善するとともに、英語コミュニケーション能力をより客観的に評価する手法について研究したい。

### 参考文献

- [1] 杉本昌弘：実践的コミュニケーション能力向上を目指す海事英語教育の取組み～英語による乗船実習とE-ラーニングによるBlended Learning～，大島商船高等専門学校紀要第40号，2007
- [2] 杉本昌弘，吉留文男：海事英語コミュニケーション能力向上のための試み－内容重視の統合学習法－，論文集「高専教育」第33号，2010